

Title	秘密結社員との交際について：アドルフ・フライヘア・クニツゲにおける「啓蒙と秘密」(I)
Sub Title	Über den Umgang mit den Mitgliedern der geheimen Verbindungen
Author	斎藤, 太郎(Saito, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.64, (1993. 12) ,p.110(101)- 125(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00640001-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

秘密結社員との交際について

—アドルフ・フライヘア・クニッゲにおける「啓蒙と秘密」(I)—

斎藤太郎

「われわれの哲学的世紀は、有害無害色々な遊戯に興じてきたが、無数の多様な秘密団体や結社もそのひとつに数えられよう。今日のどの階層を見渡してみても、知識欲、活動への衝動、他者との交遊、好奇心などにかられてすくなくとも一時そうした秘密同盟の一員となったことのないひとりは殆ど見つからないほどだ」¹⁾ 18世紀ドイツにおける秘密結社熱の蔓延ぶりを伝えるこの文は、アドルフ・フライヘア・クニッゲ (1752-96) 著の『人間交際論』中の一章『秘密結社について、また秘密結社のメンバーとの交際について』からの引用である。この作品の成功によってクニッゲの名は「礼儀作法の指南書」の同義語として普通名詞化し、『夫婦のためのクニッゲ』、『ビジネスマンのためのクニッゲ』等々の本はいまなおドイツでは書店の店頭を賑わしている。だが、著者名が普通名詞化するという稀な「名誉」は、急進的啓蒙主義の旗手という実像を「礼儀作法の先生」のイメージに歪めてしまったことで、彼にとっての不幸であったかもしれない。

実際、このハノーファーの田舎貴族は、18世紀後半の最も興味深く、奇妙で、戦闘的な人物の一人であった。彼は極めて多面的、生産的で、時代の政治的・社会的問題に積極的に参加した作家として、その短い生涯に数多くのプロジェクトに参画し、倦むことなく活動し続けた。劇作家であり、小説家であり、教育や政治関係の著作家であり、風刺作家であった。貴族身分を表す「フォン」を嫌って自分の名前から削りながらも、「男爵」を意味する「フライヘアFreiherr」を文字通り「自由人」と解してそう名乗り続

けた彼は、ペンと現実のプロジェクトを手段に、成立しつつあった市民社会に影響を行使し、旧来の制度を批判し、市民の自由を唱え続けるドイツ啓蒙主義の代表者の一人であった。だが、何よりも彼を同時代の人々にとって有名な存在としたのは、熱烈なフリーメイソンでとしての、また「啓明結社 (Illuminatenorden)」の情熱的指導者としての活発な行動であった。事実彼は上掲箇所が続けて、自分が「十分な期間、こうした事柄〔秘密結社〕に関わってきた」ことを認めている。しかし、この箇所の前後を読んだ同時代の読者はおそらく意外の念に打たれたであろう。なぜなら、そこでは彼があれほど精力を傾注した秘密結社に対する厳しい断罪がなされているからである。「そろそろいいかげんに、こういったあるいは無意味で馬鹿げた、あるいは社会にとって危険な団体を放棄するべき時が来てもよいのではなかろうか。(…) 秘密結社はすべて、程度に差こそあれ等しく無益で危険なのである」。以下彼は「若い人々が」「いかなる名称のものであれ秘密結社に加入すること」のないよう警告するため、細部にわたって秘密結社の無用性を描き出したうえでこう宣言する。「これが秘密結社に対する私の信仰告白だ」²⁾と。

秘密結社組織への積極的な参加者でありオルガナイザーであった人間が、それを全面的に否定する「信仰告白」を提出するにいたるには、どのような経緯があり、彼はその中で自分の「秘密結社観」に変更を迫られる、どのような経験をしたのだろうか。「啓蒙と秘密」を一身に体現したクニッゲの足跡をたどることは、同時にこの一見相容れぬ両要素が、この時代にもっていた錯綜した関係を確認する上でも興味深い視点を提供してくれるであろう。以下において、クニッゲの秘密結社、とりわけ啓明結社のメンバーとしての半生記ともいえるべき『フィロの説明』を中心にその過程を見てゆくことにしたい。

『啓明結社との関わりについてなされた様々な要求や質疑に対するフィロの最終的説明と回答』³⁾は、1788年に発表された自己弁護の書である。啓明結社は、1784年から85年にかけて結社からの離反者によってその「危険な

政治的陰謀計画」が暴露されたのを機に、バイエルン王カール・テオドールの三度にわたる勅令によってバイエルン内での活動を禁止されていた。そのメンバーに対しては逮捕、公職追放などの迫害が始まり、同時にこの結社を攻撃する文書がヨーゼフ・マリウス・バボによる匿名の『フリーメイソンについて。最初の警告』(1784)⁴⁾を皮切りに矢継ぎ早に発表される。これに対しやや遅れて啓明結社の側からも、自分たちに懸けられた嫌疑を晴らそうとする弁明の書が、創設者アダム・ヴァイスハウプトの同じく匿名による『啓明結社員たちの弁明』⁵⁾を初めとして次々に発表されたが、バイエルン政府は追及の手をゆるめず、1786/87年には結社の中核にいたフランツ・クサーヴァー・フォン・ツヴァックとトーマス・フライヘア・フォン・バックスのもとを家宅搜索し、そのさい押収された結社関係文書をそれぞれ『啓明結社原典資料集』、『啓明結社原典資料集補遺』⁶⁾として出版した。これによってはじめて結社の一次資料が公にされ、啓明結社の問題はバイエルン領内にとどまらず全ドイツを揺るがす一大スキャンダルに発展する。この資料集にはクニッゲの結社員名「フィロ」の署名による書簡や論文が数多く含まれていたが、事情通には明白であった「フィロ」＝クニッゲの関係はかろうじて隠されており、1784年7月1日付で公式に結社から脱退しており、その際結社について一切発言しないことを誓っていた彼はなおも沈黙を守った。だが、それも長くは続かず、翌年バックスがその自己弁明の書『異議申立て』⁷⁾の中で「フィロ」の正体を明らかにするにおよんで、おりしもハノーファーで仕官の道をさぐっていた彼は、自分の啓明結社での活動を弁明する必要に迫られることになったのである。

この弁明書の中で自己の行動の正当性を主張するに当たり、クニッゲは三つの観点から論証を進めてゆく。まず、啓明結社の発展期に創設者ヴァイスハウプトに次ぐ地位にあって組織の整備や結社員の大幅な獲得に関与した立場から、啓明結社の目的とイデオロギーが全体として、主張されるように危険なものではないことを主張し、結社への参加を正当化する。次いで、しばしば非難的となった、結社上層部による専制主義と下部メンバーの道具化といった否認しがたい要素については、これについて批判

を加え、自分の脱会を弁明する。そして最後に、公刊された資料が彼の人格と行動に否定的な照明を投げかけている部分では、これを人々を指揮する上で起こる必然的操作に帰せしめるか、あるいはそうした行動を取った当時の自分の精神状況を、まさしく啓明結社での活動を通じて獲得された「実践の人間学」によって分析・提示することで読者の理解を得ようとするのである。

さて、本稿では『フィロの説明』に拠って、当時のフリーメイソンの動向も視野に収めつつ、クニッゲが啓明結社に加入するにいたる過程を追ってみることにしたい。

クニッゲは子供の頃から父の家で「日ごとに熱っぽくフリーメイソンや秘密の知識のことが語られる」のを耳にして育ち、若くして「われわれの時代の病である、秘密団体や結社への渴望の虜にな」っていた(17)。1737年にドイツで初めてのロッジ「アブサロム」がハンブルクに設立されて以来、フリーメイソンは各地で弾圧を受けながらも、プロイセン皇太子フリードリヒ二世(のちのフリードリヒ大王)の加入などに勢いを得て、全土に急速にロッジを増加させつつあった。1769年にゲッティンゲン大学に進学したクニッゲは、イエーナ大学で創設され、ドイツ北部ならびに中部に支部を持つ学生結社「コンコルディアの堅き絆(Unzertrennlicher Concordien-Orden)」に加入する。支部の所在地が大学都市に限られていない事実から、この結社が単なる学生の友好団体と異なった性格を持っていたであろうことは推測できるが、その具体的な目的については明らかではない。⁸⁾クニッゲ自身はわずかに、この結社が「賞賛に値する意図を有してはいた」が、「徹底した計画性」に欠けた存在だったことを言葉すくなく語っているだけである(17f.)。結局この団体は彼の好奇心と知識欲を満たすことができず、却ってフリーメイソンに対する憧れは以前にもまして強くなってゆく。フリーメイソンには「これほど長い間存続し、最高に分別を具えた優れたこれほど大勢の人々の心を奪うのだから、きっと偉大で重要な事柄が隠されているに違いない」(18)との確信をもって、彼は入会条

件を満たす年齢に達した1772年カッセルにおいて、いわゆる高位階制の一派「厳格な服従（Strikte Observanz）」に所属するロッジに加入する。

「高位階制（Hochgradsystem）」とは、1750年代以降フランスから伝わったフリーメイソンの形態である。イングランドから移入したフリーメイソンが、石工ギルドの守護聖人の名を取った「ヨハネ位階」（徒弟 Lehrling、職人 Geselle、親方 Meister）の三つしか持たないのに対し、高位階制においてはこの三位階の上に、「選ばれし者」だけが授与を許される上位の位階が積み重ねられ、これを登ってゆくにつれて秘密の知識、結社の「真の」起源、目的、指導者が明らかになるとされた。こうした「貴族主義的」フリーメイソンの形態は、貴族たちが「世俗の」社会での市民階級に対する特権性をロッジにおいても主張しようとする試みである反面、市民階級のメンバーに内在する貴族的嗜好の表れと見ることもできよう。いずれにせよ、高位階制は身分制社会の階級モデルをロッジ内に持ち込むことによって、あらゆるメンバーが身分の区別なく「兄弟の絆」で結ばれるという平等の理想をなしくずしにすることになった。組織内の階層化と平行して、フリーメイソンの起源を多くの場合中世の僧職騎士団に求め、フリーメイソンをその嫡子とする伝説の形成が行われ、その結果として、疑似宗教的な粉飾をほどこした儀式が生まれ、錬金術や隠秘学の研究が盛んになった。こうした傾向はカリオストロ、ガスナー、シュレップファーといった詐欺師に恰好の活躍の場を提供するとともに、「ヨハネ位階」を下部組織として取り込むことで勢力の拡張をはかる啓明結社や黄金・薔薇十字団の潜入を可能にした。高位階制の並立は、1770年代から80年代にかけてドイツのフリーメイソンを混乱の極に追いやって、「美しい母から生まれた醜い奇形児」⁹⁾と呼ばれる状態を招くことになる。

ドイツで最有力となった高位階制である「厳格な服従」は、フリーメイソンの「真の起源」は14世紀にローマ教皇によって禁止された聖堂騎士団に遡ると考える一派で、その見解によれば聖堂騎士団はその後スコットランドに渡り、弾圧を逃れるためにフリーメイソンを隠れ蓑としながら存続していたのだとされた。¹⁰⁾これをドイツに紹介したカール・ゴットヘルフ

・フォン・フント男爵の述べるところによると、彼はパリ滞在中の1741年、折しも同地に亡命中の身でスチュアート朝英国王室の再興の機を窺っていたスコットランド王子チャールズ・エドワードの宮廷で、チャールズの随員キルマーノック卿により「イェルサレム聖堂高位結社 (Der Hohe Orden des heiligen Tempel von Jerusalem)」に入会を許され、同時に、「第七教区 (ドイツ)」における「統帥 (Heermeister)」としてこの結社の復興を委嘱されたという。フントのこの発言の信憑性を実証する資料は一つ残されておらず、また、この結社の最高指導者は「知られざる長 (der Unbekannte Obere)」として下位階のメンバーには隠されており、フントがその秘密を明かすことなく1776年に没したため、「厳格な服従」の「真の起源」は最終的に謎のままにとどまった。

自分の直接の上司ならびに「知られざる長」に対する絶対的服従という戒律によって、従来のフリーメイソンと一線を画するこの結社の位階制を図示すると以下のようなになる。

I . 象徴的 (イングランド) フリーメイソン (Symbolische [englische] Freimaurerei)

1. 徒弟 (Lehrling)
2. 職人 (Geselle)
3. 親方 (Meister)

II .

4. スコットランド位階 (Schottengrad)
5. 修練士位階 (Novizengrad)

III . 内なる (高位階) 結社 (Innerer [hoher] Orden)

6. 騎士位階 (Rittergrad)
7. 誓願騎士 (Eques professus)

「ヨハネ三位階」を通過した者は「スコットランド位階」に迎えられ、中でも選ばれた者だけが「修練士位階」を経た後、「騎士」叙任の刀札

を受け、ラテン語の騎士名を授かって「内なる結社」に入ることを許された。結社と聖堂騎士団の関係を知ることができるのは「内なる結社」のメンバーだけであった。この位階の頂点に立つ「知られざる長」は、あらゆる神秘学に通じ、聖堂騎士団の隠し財宝を所有しているとされた。

「厳格な服従」は、1764、1772、1775年のフリーメイソン会議において「真のフリーメイソン」の自家争いを巡って対立・競合する他の高位階制をあるいは退けあるいは統合することによって勢力を拡張していった。なかでも以後の「厳格な服従」の方向性を決定する重大な転回点となったのが、1772年のコロロでの会議である。ここでは前年すでにこの結社に加入していたブラウンシュヴァイク公フェルディナント（フリードリヒ大王の義弟で、七年戦争に際してプロイセン軍の総司令官を努めた）がフントに代わって「第七教区」最高指導者に選ばれ、またヘッセン＝カッセル方伯カールが新たに加入した。政治の領域でも重要な役割を演じていた二人の例にならって、後にそれぞれプロイセンとバイエルンの王位につくフリードリヒ・ヴィルヘルムとマクシミリアン・ヨーゼフや後にスウェーデン王カール三世となるゼーダーマンラント公といった高位の領主たちが次々に加入する。この展開は、外的には「厳格な服従」の名声を高めることになったが、同時にフリーメイソン内部に絶対主義体制における身分制社会のグロテスクな写し絵が持ち込まれることにもなった。とりわけ、あらゆる類の秘密結社活動に精力を注ぎ、錬金術の実験中に世を去ることになるカールの加入と共に華美と称号を求める風潮がはびこることになり、経済的余裕に乏しいメンバーが事実上「内なる結社」から締め出されず結果を招いた。

念願叶って入会を許されたクニッゲではあったが、カッセル在住の以後5年間は「徒弟」の位から昇級することができず、鬱々とした日々を送らざるをえなかった。その理由を彼は自らの「生意気さ、若さ（…）、服従精神の欠如」（18f.）などの人間的未熟さに見ると同時に、経済的困窮を理由の一つに挙げているのは、フリーメイソンに内在する問題を窺わせて興

味深い。現実の社会状況を離れた私的空間の中の「身分を超えた平等」という理想は、すでにその高額の会費ゆえに限定されたものとならざるをえなかった。1766年に父が多額の負債を遺して死去したため、領地も債権者に差し押さえられて零落貴族となったクニッゲは、生きてゆくために宮廷官吏として立つよりほかなかった。その彼が自分の「活動欲」実現の場を、現実社会のアンチテーゼである結社活動に求めたとき、それが再び経済的制約によって阻まれたという事実に彼の「虚栄心」は傷つけられる。彼はそこで「厳格な服従」の「研究」に打ち込み、いくつかの秘密漏洩文書や、ある高位階メンバーの解説を通じて本来「内なる結社」に昇進したものだけが参与しうる聖堂騎士団に関する知識を獲得し、(この事実は、結社の秘密についての沈黙の誓いがいかに拘束力に乏しいものであったかをしめている)これを手段に「金を払うことなく」昇進を遂げようと図ったが、冷淡な拒絶にあって断念する(19f.)。

こうして昇級を空しく待ちつづけていた時期にクニッゲの関心を魅いたのは、フリーメイソンと関連を持つもう一つの秘密結社「黄金・薔薇十字団」であった。彼がここに何を求めたかは、マールブルク大学医学部教授で薔薇十字団員であったフリードリヒ・ヨーゼフ・ヴィルヘルム・シュレダーについての描写が物語っている。「彼はどんなに冷静な男をも神智学や魔術や錬金術のとりこにできるような人だった。そして私は冷静な男ではなく、熱情的で、夢想家で、激しやすい二十五才の若者だった」(20f.)クニッゲはシュレダーが薔薇十字団員であったことに触れておらず、また後に自分と「黄金・薔薇十字団」との関係は一切否定しているが、¹¹⁾ 1778年の彼の書簡には、彼が当時入会を考えていたことが記されている。¹²⁾ おそらくはシュレダーが1778年10月に死んだことによって、入会は実現しなかったものの、数年後には急進的啓蒙主義の牙城と通例みなされる「啓明結社」の大立者となる彼が、神秘主義的・錬金術的傾向を持つ反啓蒙主義的結社としてその対極に位置するとされる「黄金・薔薇十字団」に接近したという事実は、合理主義と非合理主義の両陣営がこの時代

において必ずしも截然と分かたれ対立していたわけではないことを示している。¹³⁾

クニッゲのフリーメイソン活動に転機が訪れたのは、1777年ハーナウに転居してのちヴォルフエンビュッテルのフリーメイソン会議（1778年7月～8月）に参加し、ブラウンシュヴァイク公フェルディナントの知遇を得てからである。1772年以来「厳格な服従」の事実上の最高指導者となっていたフェルディナントの尽力によって諸位階を足早にのぼりつめた彼は1779年夏には「内なる結社」の「騎士位階」を獲得し、「白鳥の騎士（Eques a cygno）」の称号を得るにいたる。だが、昇級と共に段階的に明かされた結社の秘密は彼の期待に沿う内容ではなかった。1779年3月の彼の書簡にはこうある。「私はこうやって調子を合わせていますが、結局全体としては愚行というはかなく、私たちの心に滋養を与えてくれるものはほとんど見出せません」¹⁴⁾彼のここに言う「愚行」が具体的に何を指しているかは「フィロの説明」の次の箇所が明らかにしている。「この組織のかくも多くの良識ある気高い支持者たちが、昔の騎士団の外的栄光を再興するなどという些細で取るに足らぬ目的に甘んずるはずもないから、彼らがこうした児戯につきあっているとすれば、その背後にはきっとより高次の対象が隠れているに違いない、こう私には思われた」（22）「厳格な服従」のイデオロギー上の支柱である聖堂騎士団伝説が、中心メンバーの一人であるクニッゲによって「児戯」と評されるという事実は、当時ドイツはもとよりフランス、イタリア、オランダ、ポーランド、スウェーデンにまで勢力を伸ばしていたこの結社が内部からの批判によって次第に危機にさらされつつあったことを示している。

新たに22名の領主を受け入れたことによって、外的には「厳格な服従」の成功の頂点をなした1775年のブラウンシュヴァイクでの会議においてすでに、結社創設者のフントは聖堂騎士団と結社との連続性を証明するよう迫られ、苦しい言い逃れをしなければならなかった。¹⁵⁾ かくろうじて面目は保たれたものの、いったん表面化した疑惑は抑えがたく、結社の改革を求

める声は高まっていった。

こうした状況下において内部に綻びの見え始めていた「厳格な服従」に外部から打撃をあたえたのが、匿名著者による暴露文書『蹟きの石』の出版であった。¹⁶⁾ 一般の「世俗」読者に「厳格な服従」の聖堂騎士団伝説とすべての位階組織を明らかにしたこの文書によって、上司に対する絶対の服従と結社の起源と目的に関する沈黙の誓いという結社の構成原理は完全に崩壊した。この文書が結社メンバーに与えた衝撃をクニッゲは次のように描いている。「これ [『蹟きの石』の出版] は実際少なからぬ人達にとって痛撃だった。それは、他に積極的な活動領域も持たず、自分の社会的存在すべてをこの聖堂騎士団に懸けていた人々、高位の結社員として王侯と親しく交わり、一般の社会での個人的業績によっては到底得られないような名声をフリーメイソンにおいて享受していた人々、そして、この聖杯騎士団もどきによってはるかな政治的、神秘的期待を揺り起こされ、その期待に基づいて密かに権力や富や栄誉を獲得する計画を練っていた人々であった」(27f.) この危機的状況を打開し、制度改革によって「厳格な服従」を再生させるべく、ブラウنشユヴェイク公フェルディナントは再びフリーメイソン会議を今度はハーナウ近郊のヴィルヘルムスバートで開催する旨公示する。フリーメイソン史上有名なこの会議は1781年10月に招集される予定が延期され、実際の開催は1782年7月から9月にかけてになったが、その準備期間中にクニッゲは熱心な改革論者として頭角を現してゆく。

彼は「厳格な服従」が抱える問題の所在を、結社本来の目的と守るべき秘密の内容がメンバーに対して知らされず、メンバー個々が孤立させられて意見の一致を得られないため、「共同して公益のために働くこと」が不可能となっている点に見る。こうした現況を変え、「人類、とりわけ兄弟の福祉のために」貢献し、「メンバーの一人一人にそれぞれの能力に応じて国家の繁栄に役立つような活躍の場を与える」ことが出来る組織にするべく、彼は様々なシステムのフリーメイソンを「いくつかの主要な点において統合」し、個々の位階にそれぞれ特定の活動領域を割り当て、神秘的研

究には専門の「研究級」を作って独立させ、結社本来の運営から隔離することなどを骨子とする改革案を作成する(28f.)。彼は『フィロの説明』のなかでこの改革案について具体的にはこれ以上のことを語っていないが、結社メンバーの計画的登用といった人事政策や、「研究部門」と「運営部門」の分離といった点は、後に彼がおこなう啓明結社の改革にはっきり刻印されることになる。この改革案はフェルディナント公によって評価され、クニッゲはヴィルヘルムスパートの会議に正式参加を請われるが、その一方で彼は、メンバー間の党派性や私利の対立に接して会議における改革実現の困難を予想せざるをえなくなる。彼が啓明結社との接触をはじめて持ったのは、こうした状況下であった。1780年7月彼はフランクフルトのロッジで、折しも「啓明結社」の活動範囲をドイツのプロテスタント地域にまで広めるためにメンバー獲得の旅に出ているコンスタンティン・フォン・コスタンツォ侯爵〔啓明結社員名「ディオメデス」〕に出会う。ヴィルヘルムスパートの会議に対する希望を捨て、独自のシステムによる結社の設立を考えていたクニッゲに対し、コスタンツォは啓明結社の存在を告げる。「なぜ新しいものを設立しようなどと無益な労力を費やそうとなさるのですか。あなたが求めていることはすでにすべて達成してしまっている結社が、あなたの知識欲も、有益な活動を望む意欲をもあらゆる方法で満たすことのできる結社が、あなたがやりたいと思うことをすべて実行に移し、遂行しうるほどに強力に情報豊かな結社がすでに存在しているのですよ」(33) 啓明結社のメンバー獲得戦略を窺い知る上でも興味深いこの勧誘の言葉に、クニッゲはただちに入会を決意する。

啓明結社はクニッゲの入会に4年先立つ1776年5月、バイエルン唯一の大学都市インゴルシュタットの教会法ならびに実践哲学の教授アダム・ヴァイスハウプト(1748-1830)によって設立された。ヴァイスハウプトはイエズス会経営の学校に学んだ後、インゴルシュタット大学で法学を修め、1773年に25才の若さで教授に就任していた。90年にわたってほとんどすべての講座がイエズス会士によって独占されていた同大学に、非神学者として

初めて彼が教授就任を果たしたのは、学長アダム・フォン・イックシュタットの推挽によるものだったが、これはマキシミリアン三世の下で啓蒙主義的改革に着手していたイックシュタットが反啓蒙主義の牙城に楔を打ち込んだことを意味していた。イエズス会は1773年教皇クレメンス四世によって禁止されたが、元イエズス会士たちは地下に潜行してなおも活動を続け、啓蒙主義の旗手をもって任ずるヴァイスハウプトは彼らの策動との戦いを余儀なくされる。この過程で彼は、秘密組織に対抗するには秘密組織をもってするほかないとの確信に至り、4人の学生と共に啓明結社を結成した。結成時に彼が掲げた目的がどのようなものであったかは、彼がクニッゲに初めて送った書簡から窺い知ることができる。それによればこの結社は「極めて精妙で確実な手段によって目的を達し、現世において愚昧と悪業に対する美德と叡知の勝利をもたらし、あらゆる学術分野において最重要な発見を行い、団員を気高く偉大な人間へと育成し、彼らに人間的完成という報酬を現世においてすでに保証してやり、彼らを迫害や宿命や弾圧から庇護し、いかなる類の圧政も力を振るえないようにする、そのような結社」(37)であるとされている。ここにはイエズス会の対抗組織という性格を超えて、フリーメイソンに似た教育的・人文主義的精神、また啓蒙主義的アカデミー運動の精神が息づいているが、同時にまたこの両者と啓明結社とははっきりと分かち、決然とした戦闘的姿勢も読み取ることができる。

ヴァイスハウプトは、啓蒙主義の浸透はジャーナリズムを通じたプロパガンダのみによっては達成されず、理性の自己実現は現実の啓蒙絶対主義において挫折する運命にあるとの認識を持っていた。彼は啓蒙主義の勝利は、その担い手が秘密によって守られつつ組織的に行動することによってしか保証されない、と考えた。他方、このような目的のために、あらゆる人間が啓明結社のメンバーになる必要はなく、社会内の諸制度のなかに潜入し、そこで啓蒙主義を推進しうるような少数のエリート的メンバーを養成することで、最終的にはいかなる抑圧も迷信も排除されうるとした。明確に政治的な意図を有するこの計画が結社内危険分子に知られることを

防ぎ、同時に結社の意思を全面的に遂行しうるエリートを育成するために、厳格なヒエラルヒーがに則った位階制が作られ、結社の秘密がこの位階を登るにつれて段階的に明らかにされる組織が構想された。

結社の外部にたいする秘密をまもり、そのピラミッド型の支配システムを機能させていくための実践的手段は、当時最新の学問「人間学 (Anthropologie)」即ち人間に対する経験的観察を基礎とする生理学的心理学だった。この「人間学」こそは、ヴァイスハウプトの「考え方のすべて」を根底から覆して、彼を結社の創設へと導いた起爆剤でもあった。ヴァイスハウプトの述懐によれば、「身も心も思弁哲学に夢中で、形而上学的考察にふけて自分を見失っていた」彼がこの「酩酊状態からゆりおこされ、形而上の世界からふたたび地上の人間たちのもとへ連れてこられた」のは、結社創設に一年先立つ1775年、ヨーハン・ゲオルク・ハインリヒ・フェーダーの実践哲学について講義を行うよう委託を受け、これを研究したことによる。「この時からわたしの人間研究と実践的思考法がはじまった」。¹⁷⁾ 人間の観察にもとづく「人間学」は、内面に巣くう「偏見を認識し、封じ込める」ことによって人間を完成へと導くための手段であると同時に、メンバーの動向を管理して秘密の漏洩を防ぎ、彼らを意のままに操るための手段としても啓明結社の理論的・実践的支柱となった。「内心を偽る技術、他人を観察し、その胸のうちを探る技術を習得すること」が奨励されたばかりか、¹⁸⁾ ヴァイスハウプトは「一人一人が他者のスパイ」とならねばならないとまで言っている。会員は毎月自分の部下についての観察記録を結社の上司に送ることが義務づけられていた。また性格、出自、経済状態、友人関係、愛読書など多岐にわたる調査表の提出や、半生記の執筆などが実践された。ヴァイスハウプト郵便制度を活用して絶え間無く手元に流れ込んでくるこの膨大な「人間学」の資料によって、書齋に居ながらにして組織全体を細部に至るまで把握し、これを操るための完璧な監視システムが可能になると考えたのである。

啓明結社の発展速度は、会員数について言えば、1770年代の終わり頃ま

では極めて緩やかだった。¹⁹⁾ その一因はヴァイスハウプトの組織者としての能力不足にあったと思われるが、他方では上に見たヴァイスハウプトの少数エリート主義に沿った展開と見ることもできよう。結社活動の範囲がバイエルン国境を越えて北ドイツにまで拡大していくのは1780年代の初頭のことである。これは、本来目的を異にするフリーメイソンを、啓明結社の組織内に組み入れるという戦略を開始したこと起因するが、その過程で文字通り飛躍的な勢力拡大を可能にしたのがクニッゲであった。この時期ヴァイスハウプトは結社組織を現実には一部しか完成させておらず、加えてミュンヘンの「アレオパグス」メンバーとの指導体制を巡る衝突が持ち上がっており、結社は危機的状況にあった。こうした中で「その著作によってドイツの学識者の間ですでに誉れ高ただけでなく、さまざまな秘密結社についても多くの知識と経験を具えた」²¹⁾ クニッゲの加入は幸運であった。彼に関する評価の高さは、ヴァイスハウプト自身がただちに直接彼と通信を始め、アレオパグスのメンバーに迎えた事実にも現れている。これを受けてクニッゲはドイツのプロテスタント地域に向けて大々的な会員勧誘の旅をおこない、彼自身の述懐によれば、短期間の内に貴族階級のフリーメイソンを中心に五百名もの新規会員を獲得したという。²³⁾ クニッゲの活動に対するヴァイスハウプトの感激ぶりは、1781年2月のツヴァック宛の書簡に表れている「フィロ〔クニッゲ〕の働きぶりはすべての期待を上回っている。(…)フィロこそはまこと模範とするにたる男だ」。

クニッゲはまたたくまに啓明結社内ではヴァイスハウプトに次ぐ地位を占めることになり、結社組織の未完成部分を委ねられるまでに至る。しかし、それぞれに極めて个性的で対照的な両者の蜜月関係は長くは続かず、位階制度に関する見解の相違に端を発する対立は、会員獲得の方針を巡る論争によって加速され、ついにはクニッゲの脱退という結果を招くに至る。『フィロの説明』の大部分を占めるこの過程の検討は次稿にゆずりたい。

注

1) Adolf Freiherr Knigge: Über den Umgang mit Menschen. Hrsg. v. Karl

Heinz Göttert, Stuttgart 1991, S.401.

- 2) Knigge: Über den Umgang mit den Menschen, S.404.
- 3) [Adolf Freiherr Knigge]: Philo's endliche Erklärung und Antwort, auf verschiedene Anforderung und Fragen, die an ihn ergangen, seine Verbindung mit dem Orden der Illuminaten betreffend. Hannover 1788, in: Knigge, Sämtliche Werke. Bd. 12, Nendeln/Liechtenstein 1978. 以後同書からの引用は本文中に頁数のみ挙げる。
- 4) [Josef Marius Babo]: Über Freymaurer, besonders in Bayern, Erste Warnung, sammt zwey Beylagen, (München) 1784.
- 5) [Adam Weishaupt]: Apologie der Illuminaten. Frankfurt/Leipzig 1786.
- 6) Einige Originalschriften des Illuminatenordens, welche bey dem gewesenen Regierungsrath Zwack durch vorgenommene Hausvisitation zu Landshut den 11. und 12. Oktob. 1786 vorgefunden worden. Auf höchsten Befehl Seiner Churfürstlichen Durchleucht zum Druck befördert, München 1787. Nachtrag von weitem Originalschriften, welche die Illuminatenekte überhaupt, sonderbar aber den Stifter derselben Adam Weishaupt, gewesenen Professor zu Ingoldstadt betreffen, und bey der auf dem Baron Bassusischen Schloß zu Sandersdorf, einem bekannten Illuminaten-Neste, vorgenommenen Visitation entdeckt, sofort auf Churfürstlich höchsten Befehl gedruckt, und zum geheimen Archiv genommen worden sind, um solche jedermann auf Verlangen zur Einsicht vorlegen zu lassen. Zwey Abtheilungen, München 1787. 啓明結社研究上貴重な資料を提供するこの二冊は現在部分的に次の二つの研究書に収録されている。Richard van Dülmen: Der Geheimbund der Illuminaten. Darstellung. Analyse. Dokumentation, 2. Aufl., Stuttgart/Bad Cannstatt 1977; Jan Rachold (Hrsg.): Die Illuminaten, Quellen und Texte zur Aufklärungsideologie des Illuminatenordens (1776-1785), Berlin 1984.
- 7) Thomas Franz Maria von Bassus: Vostellungen denen hohe Standeshäuptern der Erlauchten Republik Graubünden, in Ansehung des Illuminaten Ordens auf hohen Befehl. [Nürnberg] 1788.
- 8) 反革命・反啓明結社派の雑誌「オイデモニア」に1796年に掲載された匿名記事によれば、「コンコルディア」には結社に対する忠誠の誓い、身の状況に関する報告書提出の義務など、後の啓明結社を思わせる要素が見られるという。Blicke in Philo's früheres Leben. In: Eudämonia oder deutsches Volksglück. Bd.3. Frankfurt 1796, S.439f.
- 9) Johann Christoph Wöllner: Die Pflichten der G[old-] und R[osen]-C[reutzer] alten Systems, in Juniorats-Versammlungen abgehandelt von Chrysphiron,

- nebst einigen beigefügten Reden anderer Brüder. [Berlin] 1782, XXX.)
- 10) 「厳格な服従」については Hermann Schüttler: Geschichte, Organisation und Ideologie der Strikten Observanz. In: Quatuor-Coronati-Jahrbuch 25 (1988), S.159—175を参照。
 - 11) 「私は(...)ドイツ薔薇十字団員とは良きにつけ悪きにつけ、ただの一度も関係をもったことはなかった」[Adolf Freiherr Knigge]: Philo's endliche Erklärung., S.48f.
 - 12) Ob Baron Knigge auch wirklich todt ist? Braunschweig 1977, S.77.
 - 13) ヤーコブ・モヴィヨンは1784年6月2日のクニッゲ宛書簡で、ハノーファーに設立された黄金・薔薇十字団支部に何人かの元啓明結社団員がいることを伝えている。Manfred Agethen: Geheimbund und Utopie: Illuminaten, Freimaurer und deutsche Spätaufklärung. Studienausgabe. München/Oldenburger 1987. S.277.
 - 14) Ob Baron Knigge auch wirklich todt ist? S.77.
 - 15) 彼は自分がパリで「剣の騎士 (Eques ab ense)」に任命された次第を語ったが、「知られざる長」の名前を明かすよう要求されると、それは沈黙の誓いゆえに出来ない、と泣き崩れたという。Eugen Lennhof/Oskar Posner, Internationales Freimaurerlexikon. Unveränderter Nachdruck der Ausgabe 1932, Wien/München 1992, S.723.
 - 16) [August Ferdinand Cranz]: Stein des Anstoßes und Fels der Ärgernis, allen meinen teutschen Mitb ürgern, in und außer der siebenten Provinz, entdeckt von "Ich weiß nicht von wem", Teutschland [= Berlin] 1780.
 - 17) Adam Weishaupt: Pythagoras oder Betrachtungen über die geheime Welt-und Regierungskunst, I, Frankfurt u. Leipzig 1790, 引用はRachold: Die Illuminaten, S.358 に拠る。
 - 18) Einige Originalschriften., S.40.
 - 19) Einige Originalschriften... の記録によれば会員数は1778年2月に9名、同年夏に25名、同年12月に60名である。S.200, 262f, 297.
 - 20) 結社の目的、創設の事情に通じた中枢会員によって1779年に作られた「アレオパグス」は、ヴァイスハウプトの「暴君」的指導方針を巡って彼と激しい対立関係に入っていた。[Adolf Freiherr Knigge]: Philo's Erklärung, S. 75f.
 - 21) ヴァイスハウプトのクニッゲ評。 Thomas Franz Maria von Bassus: Vorstellungen., S. 38f.
 - 22) ツヴァック宛書簡。 Nachtrag von einigen Originalschriften, S. 99—111.
 - 23) Einige Originalschriften., S.363f.